



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	アルバータ大学看護学部と本学看護学科の国際交流事業報告
Author(s)	浅利, 剛史、吉野, 淳一
Citation	札幌保健科学雑誌 5号 77 - 81 2016
Issue Date	2016年3月
DOI	10.15114/sjhs.5.77
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6750
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n2186621X577.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

報 告

アルバータ大学看護学部と本学看護学科の国際交流事業報告

浅利剛史、吉野淳一

札幌医科大学保健医療学部看護学科

本稿の目的は来年度以降の安定した交流について検討するため平成26年度のアールバータ大学看護学部との国際交流事業の概要について報告し、来年度以降の交流についての示唆を得ることである。本事業は平成27年2月9日から2月20日までの計8日間であった。その内容は交流研究者である筆者が設定した目的に沿って研究、教育、臨床の側面からプログラムが構成されており、大変有意義なものであった。特に、子どもの痛みに関する橋渡し研究に関する講義ならびに病院見学は筆者の関心領域と関連しているため、今後の自身の研究活動に大いに役立つものとなった。また、来年度以降の安定した派遣に向けてより具体的な目的の設定と日程調整の必要性が示唆された。

キーワード：アールバータ大学看護学部、国際交流事業、研究、教育、臨床

International Medical Exchange Program between the Faculty of Nursing, University of Alberta and the Department of Nursing, Sapporo Medical University

Tsuyoshi ASARI, Junichi YOSHINO

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

This report was written to provide a summary of the international medical exchange program between Sapporo Medical University and the University of Alberta of Canada in fiscal year 2014 (April 2014 to March 2015). It expanded into suggestions on how to ensure the sustainability of the program. The authors visited the Canadian university under the program for eight days between 9 February and 20 February 2015. The host university staff kindly arranged an extremely productive program covering the research, education and clinical aspects of the subject matters that reflected the visit objectives. The visitors found that a lecture on bridging studies in child pain and a visit to the university hospital were particularly relevant to their area of interest and offered valuable input to their future research plans. On reflection of their experience, the authors suggested that the success and sustainability of the program would depend largely on each future visitor's commitment to have clear and specific objectives to achieve from the visit, as well as effective coordination of the visit schedule.

Key words : Faculty of Nursing University of Alberta, international medical exchange program, research, education, clinical practice

Sapporo J. Health Sci. 5:77-81 (2016)

DOI:10.15114/sjhs.5.77

I はじめに

筆者は平成26年度国際医学交流事業の交流研究者としてアルバータ大学における研修の機会を得た。本事業において看護学科では「札幌医科大学とアルバータ大学との合意書（MOU:Memorandum of Understanding）」に基づき、アルバータ大学看護学部との交流の定着を図るため平成26年度より毎年の派遣を行う予定である。そこで今回、初年度の交流研究内容について報告し、来年度以降の安定した交流のあり方について検討することとした。

II 交流研究内容

1. 目的

交流研究にあたり、筆者の専門領域を考慮して以下の3点の目的を設定した。

- 1) 教育：CBL（Context Based Learning、実際の事例や仮想事例を用いて学ぶ方法）の実際を知ること。
- 2) 研究：CIHR（Canadian Institutes of Health Research、カナダの保健研究の政府機関）のTeam in Children's Painの具体的な研究内容を知ること。
- 3) 臨床：外来・病棟で実施されている穿刺を伴う処置を受ける子どもにどのような看護を提供しているのかを知ること。

以上のように設定した。

2. 期間

2015年2月8日～2015年2月22日

3. 概要

交流事業の場所は主にアルバータ大学の医療系学部や研究機関が入っているEdmonton Clinic Health Academy (ECHA) で行われた（写真1）。本棟は健康科学に関連し



写真1 Edmonton Clinic Health Academy

た分野の研究者・教育者らが協働することを目指し、2012年に建設された。本事業におけるアルバータ大学看護学部の受け入れ調整担当者はGlobal Nursing Office の代表であるDr. Bartonであった（写真2中央）。彼女が滞在中のブ

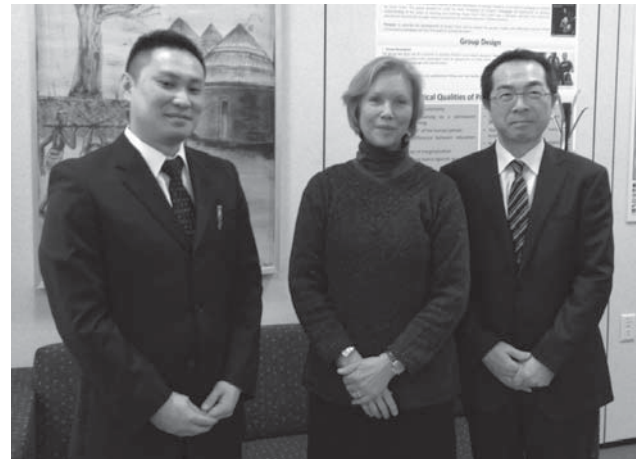


写真2（右より、吉野教授、Dr. Barton、筆者）

ログラムの調整を行った（表1）。交流研究目的に沿って、プログラムの概要を紹介する。なお、交流事業期間は大学のリーディングウィークであった。そのため夜間のセミナーは行われていたが、日中の講義等はほとんど開講されていなかったためCBLの実際を見学することはできなかった。

表1 訪問スケジュール

2/9	・オリエンテーション ・プレゼンテーションの聴講 ・Global Citizenship in Health course の聴講 (Dr. Sylvia)
2/10	・事務処理 ・キャンパスツアー ・Interprofessional Health Team Development の聴講 (Dr. Bukola)
2/12	・Fort Saskatchewan Corrections の見学 (Mr. Stewart MacLennan)
2/13	・Degree Program の概観 (Dr. Sylvia Barton)
2/17	・Simulation Laboratory の見学 (Ms. Gerri Lasiuk) ・Canadian Health Care System の概観 (Ms. Ginger Sullivan) ・日本の小児看護についてプレゼンテーション
2/19	・小児看護領域における橋渡し研究と臨床 (Dr. Shannon Scott, Ms. Kathy Reid, Ms. Leeann Lukenchuk)
2/20	・Aboriginal Nursing の概観 (Ms. Caroline Foster-Boucher) ・Wrap up (Dr. Sylvia Barton)

1) 教 育

(1) Global Citizenship in Health course の聴講

2月9日(月)18:00-21:00に行われた本科目を聴講した。この科目は看護学部の学生を対象に行われるセミナー形式の科目であり、参加している学生の出身国はカナダ、アメリカのほかインド、フィリピン、ガーナなどの学生10名程度の国際的なセミナーであった。この日のセミナーは、倫理がテーマであった。Dr. Bartonによる倫理に関する諸問題(例えば、地域格差や研究倫理など)の講義後に学生自身の考えを發表し、ディスカッションするという形式であった。セミナー名の通り、学生は自身の出身国の文化や背景をもとに自分の意見を構成していた。そして、他国出身の学生の考えを聞いたり、ディスカッションするということを通じて倫理観の多様性や自国の現状を再認識する機会となっていた。

(2) Interprofessional Health Team Development の聴講

2月10日(火)16:00-20:30に行われた。本科目は看護学部だけではなく、他の医療系の学部である医学部、薬学部、歯学部、リハビリテーション医学部など医療系の他学部の学生が参加している科目であった。この科目は、将来、他の職種と働くための準備としてさまざまな職種のチームとしてのスキルを育む機会を提供している。グループワークが主の科目であり、100名程度の学生が受講していた。この日のテーマは“discrimination(差別)”であった。7-8名でグループは構成されており、グループワークにて当概念についてブレインストーミングを行った後にグループ間でdiscriminationという概念についての共有がなされていた。その後、discriminationのラダーについての講義があった。具体的に差別の程度の軽い順にbias、stereotype、prejudice、discrimination、systematic discriminationの段階に分けられ、prejudiceまでが態度による差別、discriminationからが行為による差別という区分ができ、それぞれの段階においてそれらの差別をどのように医療者として解決するのかという具体的な方法が提示されていた。

(3) Degree Program の概観

2月13日(金)10:00-12:00にDr. Bartonからdegree programの概観、主にundergraduate programについて紹介してもらった。学部のプログラムには(1) BScN-Collaborative Program、(2) BScN-Bilingual Program、(3) BScN-Honors Program、(4) BScN-After Degree Program、(5) Registered Psychiatric Nurse (RPN) to BScN Programの5種類がある。(1) BScN-Collaborative Programは一般的なプログラムだが、4年間のプログラムはアルバータ大学だけではなく、Red Deer College、Keyano College、Grande Prairie Regional Collegeでも単位取得が可能であるため、“Collaborative Program”と呼ばれている。(2) BScN-Bilingual Programはカナダの公用語である英語とフランス語のどちらも使用できることを証明された学生を対象に、看護学部に加え同じエドモントン市内にあるFaculté Saint-Jeanで授業を受け、両言語に

よる看護の提供を可能とする、あるいはフランス語を話す地域のニーズに応えるために設計されたプログラムである。

(3) BScN-Honors ProgramはBScN-Collaborative Programに在籍している成績優秀な学生が1年目、あるいは2年目が終了した後に出席することのできるプログラムである。BScN-Collaborative Programに加え、研究領域におけるより深い知識を得ること、看護学部の研究者により指導を受けられる機会が提供される。(4) BScN-After Degree Programは他領域の学士号取得者が看護学の学士号を取得するためのプログラムである。(5) Registered Psychiatric Nurse (RPN) to BScN Programは精神看護師のdiplomaを取得している者を対象に、BScN取得のために設定されたプログラムである。以上のようにさまざまな学部のプログラムが学生のニーズに対応して準備されていた。

(4) Simulation Laboratory の見学 (写真3)

2月17日(火)10:00-11:00にSimulation LaboratoryをMs. Lasiukの案内のもと、見学した。この実習室ではさまざまな看護技術(救急処置、ヘルスアセスメント技術、循環動態のアセスメント、創傷ケアなど)を演習することができる環境が整っていた。シミュレーション教育には学生の到達すべき目的に応じて3つのレベルがありSimulation Laboratoryにはすべてのレベルに対応できる環境が整っていた。3つのレベルとは、(1) Low-fidelity Simulation(特定の看護技術を学ぶためにモデルや人工のからだの模型を使うことやロールプレイなどを通じて行うレベル)、(2) Medium-fidelity Simulation(単純な健康状態から複雑な症状を再現できるより本物の患者に近いシミュレーターを用いてシミュレーションを行うレベル)、(3) High-fidelity Simulation(さらに臨場感のあるシミュレーターであるLaerdal SimMan® 3G、Simulaid's Smart StatやGaumard Scientific S550 NOELLE™ Maternal and Neonatal Birthing Simulatorを用いてシミュレーションを行うレベル)である。学生達はインストラクターとともに小チームを作り、実践、評価、そして看護行為やコミュニケーション技術を文書化



写真3 birthing simulator

する。学生達が行った看護展開はすべて記録されていた。

2) 研 究

(1) 小児看護領域における橋渡し研究と臨床

2月19日(木)10:00-15:00にDr.Shannon ScottによるCIHR (Canadian Institutes of Health Research) 内の Team in Children's Painの橋渡し研究の概要、Ms. Kathy Reid, Ms. Leann Lukenchukにより Stollery Children's Hospitalの見学を行った。Team in Children's Painは子どもの急性疼痛に関する橋渡し研究を評価することをゴールにすえたチームである。このゴールのために、カナダ国内の子どもの疼痛研究のデータベースを集約化(プロジェクト1)、痛みの文脈の包括的な評価方法の開発(プロジェクト2)、臨床への橋渡し介入の評価(プロジェクト3)の3つのプロジェクトにより構成されていた。プロジェクト1、2により開発された多次元の橋渡し戦略の実践と評価の結果を実際にどれだけの効果があったのかを明らかにするためにプロジェクト3では標準的なケア群とEvidence-based Practice for Improving Quality (EPIQ) 群に分けた比較対照研究が行われた¹⁾。対象施設は標準的なケア群16病棟、EPIQ群16病棟で行われ、評価時期は介入前、介入終了直後そして介入後6ヶ月に評価が行われた。この研究において Stollery Children's Hospitalも参加していた。研究結果としてEPIQ群は標準ケア群より妥当性のある疼痛評価ツールを使用していること、痛みに対して鎮痛や身体的な痛みの管理を受けている患者の割合が多いこと、が明らかにされており、橋渡しの介入に効果があったことが明らかとなった。

Stollery Children's Hospitalでは子どもの痛みに対する取り組みとして、痛みの管理に関するアルゴリズムの導入(図1)、穿刺を伴う処置時にはEMLA® Cream (リドカイ

ン、プリロカイン含有の局所麻酔外用薬)を用いて除痛を図る、という取り組みを行っていた。

3) 臨 床

(1) Fort Saskatchewan Corrections の見学

矯正施設内にある診療所の見学を行った。この矯正施設では医師のほかにNurse Practitioner (以下、NP) が週2回の頻度で診察を行っており、その診察の様子を見学した。NPは修士レベルの学位を修得しており、高度看護実践家として診断・処方などができる。カナダにおけるNPの裁量権として検査オーダー、診断、薬剤の処方(法により定められた特定の物のみ)が認められている²⁾。対象者は全員囚人であり、男女問わず受診していた。午前中のみ診察で計18名の患者の診察を行っていた。受診している患者は様々であり、乳がん、高血圧、外傷、糖尿病、妊婦などを対象に診察(問診、聴診、視診等)後、処方(内服薬、胸部レントゲン写真、マンモグラフィー)や処置を行っていた。MacLennanは医師と行っている診察とほぼ変わらず、医師や他のメディカルスタッフと情報を共有しながら診察を行っていた。診察のほかにも継続処方やカルテ受診のチェックなどを含めると午前中だけで50名前後の患者についての診察を行っていた。

午前の診察終了後にMacLennanは月に1度、診療所の医療スタッフにフィジカルアセスメントのレクチャーを行っており、見学時はレクチャー日であった。その日の内容は膝関節のアセスメントで、可動域や痛みなどの評価方法を実践し、他のメディカルスタッフに実践してもらうという内容であった。MacLennanはこのレクチャーの意義を「彼女ら(夜勤を担当している看護師)の記録、アセスメントは私が診断することを助けてくれる。それが患者のためになる。だから彼女らの仕事に感謝すると同時に、さらにその能力を向上させるのが私の役割だと思ってレクチャーしている」ということを話してくれた。

(2) Aboriginal Nursing の概観

2月20日(金)11:00-11:30にカナダの先住民族の健康に関する諸問題とその諸問題に対するアルバータ大学の取り組みをMs. Carolineより講義を受けた。先住民族の健康に関する諸問題として以下のような諸問題があげられる。

- (1) 糖尿病の発症率が他のカナダ人の3-5倍高い
- (2) カナダにおける全AIDS患者の16.4%が先住民族(カナダの先住民族の割合:3%)
- (3) 心臓病の発症率が他のカナダ人より1.5倍高い
- (4) 結核の発症率が他のカナダ人より8-10倍高い
- (5) がんの発症年齢が他の一般的なカナダ人よりは早い
- (6) 外傷を受ける確率が他のカナダ人より高い
- (7) 自殺率が他のカナダ人と比べると少なくとも2倍

これらの課題に対するアルバータ大学の取り組みとしてキーとなる目標を次のように設定していた。

- (1) アボリジニの看護学生の入学数を増やすこと

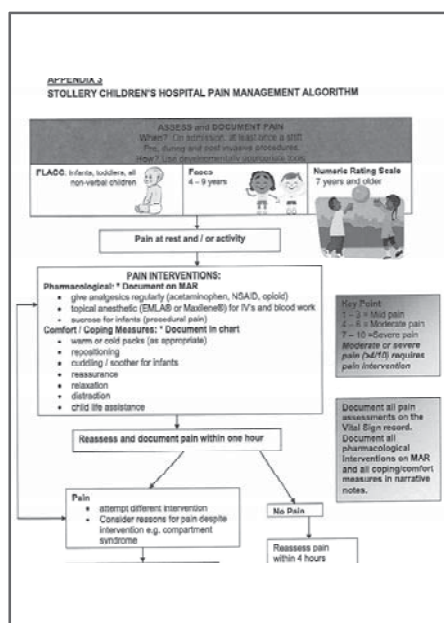


図1 Stollery Children's Hospital Pain Management Algorithm

- (2) 看護学部でアボリジニの学生に継続的なサポートを提供すること
- (3) アボリジニの知識体系を尊重し認めること
- (4) 学生と教員間で能力を構築すること
- (5) アルバータ州北部のアボリジニのコミュニティとの相互関係を発展すること

これらの目標を掲げ、アボリジニの学生、スタッフや教員、看護師に対するサポートが用意されていた。

Ⅲ おわりに

平成26年度国際医学交流事業における、本学看護学科とアルバータ大学看護学部の交流事業の概要を報告した。本事業は交流研究が主であるが、初回である平成26年度は見学が主であった。その内容は、学部教育のカリキュラムについての聴講や見学、臨床現場の見学、ならびにトランスレーショナルリサーチの実際を見学するというものであり、自身の臨床・研究・教育活動に役立つ大変充実した内容であった。今後の交流のあり方として、先方がプログラムをコーディネートしやすくするために目的をより明確に示すこと、その目的に沿ったプログラムを受けるために交流する時期の調整（今回はアルバータ大学のリーディングウィークであり学部の講義がなかった）が必要と思われる。さらに、今後は安定し交流を深めていくなかで両大学の看護学の教員間で行う共同研究などに発展させるなど、積極的な交流を図っていきたい。

文 献

- 1) Stevens Bonnie J., Yamada Janet, Estabrooks Carole A., et al: Pain in hospitalized children : Effect of a multidimensional knowledge translation strategy on pain process and clinical outcomes. PAIN. 155 : 60-68, 2014
- 2) 江藤美和子 : 諸外国の看護裁量権② : オーストラリア、イギリス、カナダ、タイ、韓国におけるNPの裁量権と活動. インターナショナルナーシングレビュー. 33 (1) : 47-51, 2010